

障害児支援の質を評価するための項目：保護者視点に基づく重要度評価

研究分担者 稲田 尚子（帝京大学文学部心理学科）
研究代表者 内山 登紀夫（大正大学心理社会学部臨床心理学科）
研究分担者 安達 潤（北海道大学大学院教育学研究院）

【研究要旨】

障害児支援施設の支援の質を評価するための外部評価の項目案に対して、当事者の意見を収集することを目的として、障害児をもつ全国の保護者にアンケート調査を実施した。外部評価の項目案に対して、とても重要であるから全く重要ではないまで 5 件法で Web アンケートにて回答を求めた。1～138 名（男：女=10：128）から回答が得られ、ほとんどの項目で重要であると判断された。とりわけ重要度が高いと判断されたのは、障害特性に基づく支援、個別のニーズに基づく支援、ほめられる機会と失敗しても修正できる機会があること、支援者から穏やかな声で対応されていること、保護者と支援者の適切な情報共有であった。一方、重要度が低いと判断されたのは、3 項目のみであり、ボランティアの受け入れ、できるだけ失敗せずに学ぶこと、祖父母への心理教育であった。以上の結果より、外部評価項目案に対して、保護者は重要であると判断し、項目の妥当性が確認された。とりわけ、障害特性および個別のニーズに基づく支援に対して、重要度の認識が高かったことから、支援の第一歩として、障害特性と個別のニーズに対するアセスメントが重要であると考えられる。重要度が低いと判断された項目に対しては、今後修正するあるいは削除するなどを検討するための資料が得られた。

A. 研究目的

“Nothing about us without us”（私たち抜きに私たちのことを決めるな）は、「障害者の権利に関する条約（Convention on the Rights of Persons with Disabilities）」（以下「障害者権利条約」という。）策定の過程において、すべての障害者の共通の思いを示すものとして使用された。本研究班では、障害児支援施設の支援の質を評価するために、主に専門家の意見を収集して検討したが、その次の段階として当事者の意見を収集する必要がある。本研究では、障害児をもつ保護者を対象に、研究班で作成した外部評価のための 100 項目について意見を収集することを目的

として行った。

B. 研究方法

対象 障害児をもつ全国の保護者を対象に、任意でアンケート調査を依頼した。138 名（男：女=10：128）からの回答が得られた。対象者の性別を表 1 に、対象者の年齢を表 2 に示す。女性の回答が圧倒的に多く、40～44 歳の対象者が多い傾向にあった。そして 30 代後半から 50 代前半の方々が主に解答した。対象者の都道府県別の人数を図 3 に示す。東京都が際だって多く、東京都の次に多い神奈川県と約 20 人もの差がある。

表 1. 対象者の性別

性別	件数	構成比
回答		
男性	10	7.2%
女性	128	92.8%
計	138	100.0%

表 2. 対象者の年齢(歳)

年齢	件数	構成比
回答		
～19	0	0.0%
20～24	0	0.0%
25～29	1	0.7%
30～34	10	7.2%
35～39	22	15.9%
40～44	40	29.0%
45～49	38	27.5%
50～54	18	13.0%
55～59	8	5.8%
60～64	1	0.7%
65～69	0	0.0%
70～	0	0.0%
計	138	100.0%

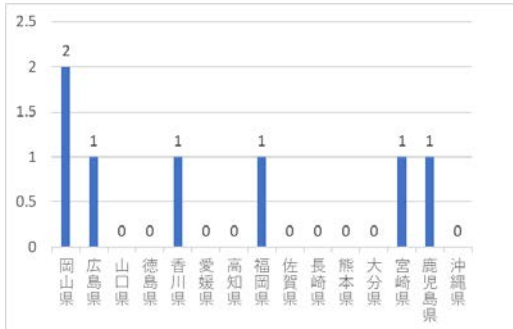
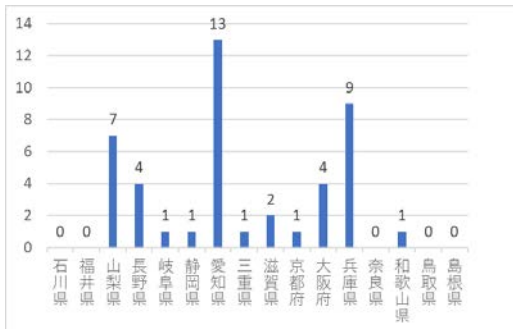
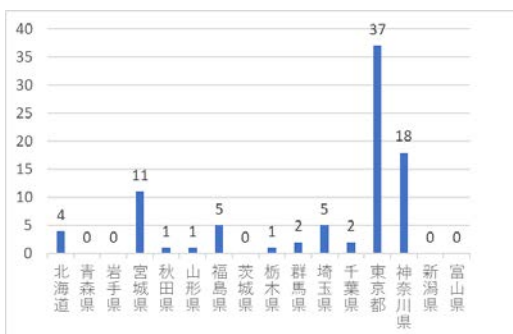


図 3 対象者の都道府県別の人数

調査項目 本研究班で作成した外部評価のための項目案 100 項目および回答の妥当性を確認するための 7 項目、計 107 項目について、当事者がどの程度重視しているのか、Web アンケートにて 5 件法で回答してもらった。とても重要である=5 点、重要である=4 点、どちらともいえない=3 点、重要ではない=2 点、まったく重要ではない=1 点として得点化を行った。得点が高いほど、重要度が高いと判断されたことを示す。

C. 研究結果

1. 子どもの特徴

対象者が想定して回答する子どもの特徴を表障害のある子どもについて、性別を表 3 に、年齢帯を図 2 に、子どもの障害の種類を図 3 に示す。男子が多く、7～12 歳の小学生の時期に当たる年齢帯が 65 人 (47.1%) で最も多い。子どもの障害の特徴については、複数回答が可能である質問であるが知的障害と発達障害への回答が多く、そのほかの 4 つの回答より大きく差がある。

表 3 対象者が想定して回答する子どもの特徴

Q1 これから、障害のあるお子様についてお尋ねします。該当のお子様がお二人以上いらっしゃる場合は、どなたかお一人を想定してご回答ください。

回答	件数	構成比
男	100	72.5%
女	38	27.5%
その他	0	0.0%
計	138	100.0%

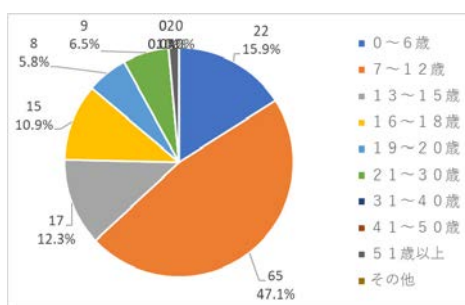


図 2 子どもの年齢帯

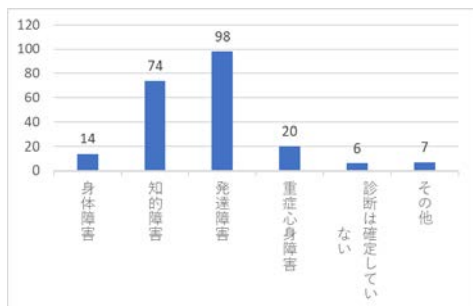


図3 子どもの障害の特徴

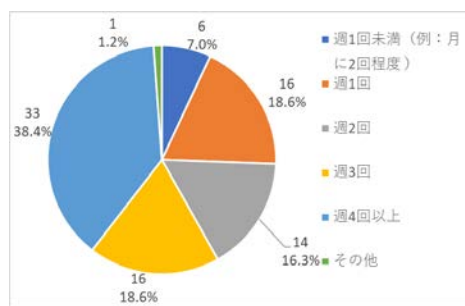


図5 週当たりの平均利用日数

2. 障害児支援施設の利用状況

現在障害児支援事業の利用の有無について表4に示す。無回答が20人程度いたようだが、障害児支援事業を利用しているの方が圧倒的に多い。

表4 障害児支援事業の現在の利用の有無

Q4 現在、お子様は、障害児支援事業(放課後等デイサービス、児童発達支援事業、保育所等訪問支援事業、入所施設)のいずれかあるいは複数を利用されていますか？

回答	件数	構成比
はい	106	89.1%
いいえ	13	10.9%
計	119	100.0%

利用している障害児支援事業所の形態を図4に示す。

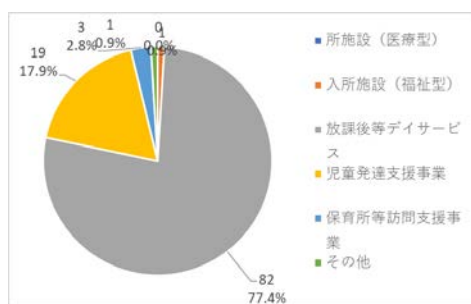


図4 利用している障害児支援事業所の形態

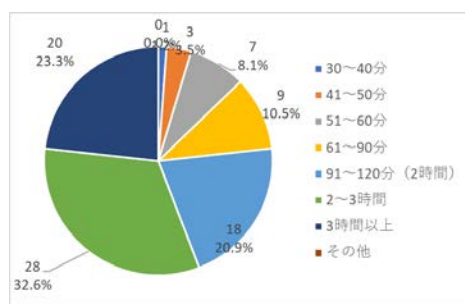


図6 1回あたりの利用時間

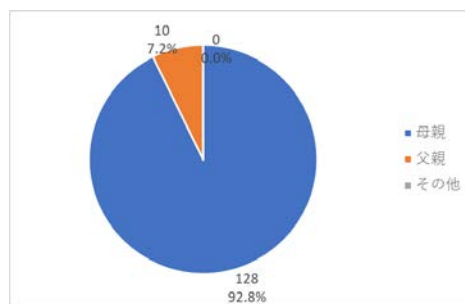


図7 回答者の属性

3. 外部評価の各項目に対する保護者が認識する重要度

外部評価の各項目に対する保護者が認識する重要度を表4に示す。妥当性を確認するための7項目は、重要度の得点が低く、回答の妥当性が確認された。研究班で作成した100項目に関しては、ほとんどの項目で重要であると判断された。とりわけ重要度が高いと判断されたのは、障害特性に基づく支援、個別のニーズに基づく支援、ほめられる機会と失敗しても修正できる機会があること、支援者から穏やかな声で対応されていること、保護者と支援者の適切な情報共有であった。

一方、3.5 を下回り、重要度が低いと判断されたのは、3 項目のみであり、ボランティアの受け入れ、できるだけ失敗せずに学ぶこと、祖父母への心理教育であった。

表 4 外部評価項目に対する重要度

ダミー除外スコア順

設問	スコア
	全体
Q11S52 子ども一人一人は、個別の障害特性に配慮された支援を受けている	4.64
Q11S64 子ども一人一人は、ほめられる機会と失敗しても修正できる機会をもっている	4.61
Q11S17 子ども一人一人は、支援者から穏やかな声や表情で対応されている	4.60
Q11S8 子ども一人一人は、個人のニーズに応じた個別の支援を受けている	4.58
Q11S55 保護者は、支援者から子どもの情報を適切に伝えられ、相互共有できている	4.58
Q11S19 子ども一人一人にとって、その空間は適度なスペースで清潔に保たれ、快適に過ごしている	4.58
Q11S41 支援者は、子どもが問題行動を起こす理由を理解し、問題行動を軽減するためのスキルを有している	4.56
Q11S16 子ども一人一人は、助けを求めていることや拒否を表現できる環境設定や支援を受けている	4.55
Q11S103 子ども一人一人の日常や療育機関、施設での様子は、定期的に家族と支援者間で情報共有がなされている	4.55
Q11S105 子ども一人一人は、当事業所の支援に満足している	4.54
Q11S50 子ども一人一人は、個別のアセスメントに基づいて立案された個別支援計画により支援を受けている	4.54
Q11S27 子ども一人一人には拒否の意思表明が保障され、可能な限り、その意思が受け入れられる、あるいは代替案が用意されている	4.52
Q11S83 事業所は、支援者や家族による虐待の可能性について考慮しており、その疑いがある場合、適切な機関に報告している	4.52
Q11S66 子ども一人一人は、本人の能力と特性に応じた教育を受ける機会が提供されている	4.51
Q11S28 子ども一人一人は、適切なコミュニケーションの方法を学んでいる	4.50
Q11S13 子ども一人一人の支援の目的と内容は、事業所、家庭、関係機関で共有されている	4.50
Q11S18 支援者は、子ども一人一人の長所に基づいた支援を提供している	4.50
Q11S70 子ども一人一人は、次のライフステージ、関係機関、一般施策機関への移行に際して、支援が途切れないための引継ぎを受けている	4.49
Q11S63 支援者は、チーム連携による発達支援を実施している	4.48
Q11S67 支援者は、運動・認知・言語・情緒の定型的な発達についての基本を理解している	4.47
Q11S12 支援者は、子どもの支援について定期的に支援者間でミーティングを行っている	4.46
Q11S40 支援者は、対象児をアセスメントする適切なツールや方法を理解し、アセスメントするスキルを有している	4.46
Q11S65 自立に向けて、子ども一人一人は、障害について十分な理解に基づいた適切な支援を受けている	4.44
Q11S31 事業所は、定期的にスタッフ研修を実施している	4.42
Q11S97 保護者は、子どもの特性理解に向けた支援者との話し合う機会を提供されている	4.42
Q11S48 子ども一人一人は、視覚的理解と聴覚的理解の優位性の確認と配慮に基づいた支援を受けている	4.42
Q11S29 子どもの環境は、障害に応じた整備がされており、また必要な道具が準備されている	4.41
Q11S34 支援者は、ケース会議を定期的に行っている	4.39
Q11S54 支援者は、関係する職員間で支援の実効性に資する情報共有を行っている	4.36
Q11S33 支援者は、外部の研修会に参加して専門性を高める機会を提供されており、勤務時間内での研修受講も認められている	4.35
Q11S58 子ども一人一人は、スキルの獲得に際して、その自立的使用に必要な適切な補助を伴った支援を受けている	4.35
Q11S15 子ども一人一人は、自己決定する力を育てるための支援をうけている	4.35
Q11S88 保護者は、定期的に支援者との面談の時間を提供されている	4.32
Q11S56 支援者は、子どもに多様な体験を提供できるような支援を計画している	4.32

Q11S104 家族は、当事業所の支援に満足している	4.31
Q11S11 子ども一人一人は、過剰な感覚刺激に晒されないように、環境上の配慮がされている	4.31
Q11S38 事業所は、子ども一人一人に対する支援の効果を検証している	4.31
Q11S106 保護者に向けた書類(個別支援計画や検査報告書等)は、保護者に分かりやすく、専門用語を使わず、子育ての参考や子供の理解につながるような内容である	4.30
Q11S49 子ども一人一人は、子どもの嗜好(好み)の把握に基づいた配慮ある支援を受けている	4.30
Q11S94 保護者は、子育てに関する困難や不安を感じる点について支援者と話し合う機会を提供されている	4.29
Q11S102 家族の状況について、家族自身が感じていることと支援者が理解していることに大きな齟齬がなく、共通認識がある	4.29
Q11S24 子ども一人一人は、気の合う、信頼できる人とやりとりをしている	4.28
Q11S59 子ども一人一人は、スキルの自立的使用に向けて、スキルの獲得段階に応じて調整された補助支援を受けている	4.28
Q11S42 事業所は、新人研修のためのプログラムを計画し、また定期的にスキル習得の度合いを確認している	4.27
Q11S78 支援者は、子ども一人一人が所属している保育園、学校、医療機関等と積極的に連携をとっている	4.27
Q11S45 保育所等訪問支援事業において、事業所は、保育所等訪問支援に、適切な経験ある支援者を派遣している	4.26
Q11S107 保育所等訪問支援において、保育者は、支援担当者から専門用語を多用されず、分かりやすい表現で、説明を受けている	4.26
Q11S20 子ども一人一人は、食事を楽しく食べている	4.25
Q11S47 事業所は、支援者に、経験値に応じた頻度でのスーパービジョンやコンサルテーションを受ける機会を提供している	4.24
Q11S62 子ども一人一人は、活動エリアが明確に設定され、本人が最も理解できる方法でスケジュールが提示された支援環境を提供されている	4.24
Q11S14 保護者(および可能な範囲で子ども自身)は、個別支援計画の作成に参加している	4.24
Q11S68 子ども一人一人は、近い将来に必要なスキル獲得に向けた支援を受けている	4.23
Q11S69 子ども一人一人は、現時点で必要なスキル獲得に向けた支援を受けている	4.22
Q11S10 子ども一人一人は、自立やスキル獲得を促すために家具のレイアウトが配慮されたり、必要な物が用意されている	4.22
Q11S30 子ども一人一人は、障害児支援に関するガイドラインに沿った支援を受けている	4.21
Q11S73 子ども一人一人は、日常生活での適応状況が評価され、また適応を促すための支援を受けている	4.19
Q11S61 支援者は、個別支援計画の目標の主語を利用者にしてしている	4.18
Q11S46 保育所等訪問支援事業において、支援者は、訪問前に家族や保育所等との調整を行っている	4.17
Q11S100 保護者は、支援者から共感的に支援されている	4.16
Q11S43 事業所は、支援者に、虐待・身体拘束の研修に参加する機会を提供している	4.16
Q11S71 子ども一人一人は、余暇スキルのレパートリーを増やすための支援を受けている	4.15
Q11S26 子ども一人一人は、自分のペースで動けるように配慮されている	4.15
Q11S39 事業所は、統一した書式で、サービス提供内容を記録している	4.14
Q11S72 保護者は、子どもの将来の状態像とのつながりがわかるよう配慮された情報提供を受けている	4.14
Q11S93 保護者は、支援者に話を個別にあるいは集団の場で傾聴してもらう機会を提供されている	4.14
Q11S80 子ども一人一人は、必要な時に自分に合った方法で地域生活に必要なことを学んでいる	4.13
Q11S84 入所施設で生活する子ども一人一人は、家族に会う機会や入所施設以外の友人と遊ぶ機会が提供されている	4.12
Q11S53 支援者は、訪問支援(保育所等訪問支援、家庭訪問等)において、行動観察と関連情報の収集に基づいた適切な助言を行っている	4.12

Q11S36 事業所は、専門職のOJT(On the Job Training)による職員研修を行っている ※OJTとは、日常業務を通じた職員研修のこと	4.10
Q11S60 支援者は、個別支援計画の中に、獲得したスキルを幅広い生活場面で使うための内容を盛り込んでいる	4.09
Q11S21 子ども一人一人は、可能な限り、生活の中で自分の好みが反映されるように配慮されている	4.08
Q11S92 保護者は、子どもの療育や支援の目標・アイデアを支援者と共有する機会を頻繁に提供されている	4.07
Q11S91 保護者は、子どもへの支援の記録を共有できるシステムが提供され、利用可能である	4.07
Q11S22 子ども一人一人は、可能な限り、自分の時間や物、行動などを自分で管理することを学び、行っている	4.06
Q11S82 子ども一人一人が、安心して受診できる医療機関との繋がりを得られるように努力している	4.06
Q11S23 子ども一人一人は、可能な限り、自分の役割(食事の手伝い・掃除など自立に向けた)をもち、最後までやり遂げている	4.03
Q11S25 子ども一人一人は、自分が理解できるように支援内容と方法についての情報提供を受けている	4.01
Q11S75 子ども一人一人は、地域の公園や文化・スポーツ施設等に外出する機会が提供されている	4.01
Q11S76 支援者は、地域の関係者会議に出席している	4.00
Q11S99 保護者は、保護者自身の価値観を尊重されている	3.99
Q11S37 事業所は、心理士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士などの専門職を配置している	3.99
Q11S98 保護者は、子育てに関する自身のニーズに対する支援を受けている	3.97
Q11S35 事業所は、他事業所の見学、交換研修を行っている	3.96
Q11S57 支援者は、個別支援計画立案の際に、6ヶ月以内に達成が見込まれる具体的な目標を設定している	3.93
Q11S87 保護者は、支援者から、子どもの発達課題に家庭で取り組むための手続きや工夫を指導されている	3.93
Q11S81 子ども一人一人は、次のライフステージに応じた将来の夢や希望を実現するための話し合いに、可能な限り参加している	3.87
Q11S51 子ども一人一人の行動変化は、毎回、直接観察により継続的に数量的に評価されている	3.87
Q11S96 保護者は、きょうだい児やきょうだい関係について相談する機会があり、配慮事項や助言が提供されている	3.84
Q11S89 保護者は、保護者対象の勉強会の機会を提供されている	3.84
Q11S101 保護者は、支援者と同等の立場で支援を受けている	3.82
Q11S79 子ども一人一人は、本人の意思や好みに応じて地域の行事に参加したり、地域の人とふれあう機会を提供されている	3.78
Q11S77 事業所は、保育所等訪問支援により、子どもの集団生活の場での直接支援を行っている	3.76
Q11S32 事業所は、実務経験が継続5年以上の指導員を配置している	3.74
Q11S74 事業所は、ホームページやSNS等で事業所に関する情報を発信している	3.67
Q11S9 子ども一人一人は、必要に応じて個別の部屋の使用が認められている	3.66
Q11S85 入所施設で生活する子ども一人一人は、同性・異性の友人と交際する自由が保障されている	3.65
Q11S86 保護者は、保護者同士で交流する機会を提供されている	3.55
Q11S90 保護者は、先輩保護者と交流する機会を提供されている	3.53
Q11S44 事業所は、必要な研修を実施した上で、ボランティアを受け入れている	3.39
Q11S108 子ども一人一人は、できる限り失敗せずに学べるよう計画されている	3.33
Q11S95 祖父母は、保護者の求めに応じて、孫をよりよく理解するための支援を受ける機会を提供されている	3.22

D. 考察

障害児支援の支援の質を評価する外部評価の項目案に対して、全国の当事者の保護者からの意見が収集された。いずれの項目も重要度は高いと判断されたが、最も重要と判断されたのは、障害特性に配慮した支援であった。多様な障害をもつ子どもが施設を利用するが、一人一人の障害の種別や特性に応じた支援を提供できるように努めていく必要がある。その上で個々の行動に対し、その個人にどのように支援をしていくのかを検討する必要がある。そのための第一歩はアセスメントであると考えられ、今後は支援を開始する前あるいは開始して間もない時期に、子どもの障害特性を把握するためのアセスメントを実施する必要があると考えられる。

E. 研究発表

本研究に関する発表なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

特許取得・実用新案登録なし

G. 開示すべき利益相反なし